

中世曹洞宗の地方展開と源翁心昭

石 川 力 山

道元下の日本曹洞宗が、今日見られるような全国的規模に発展する契機となったのは、道元下四世の峨山韶碩（一二七五～一三六五）の会下から排出した、五哲あるいは二十五哲と呼ばれる多くのすぐれた弟子達の活動による、地方教化である。もちろん寺院の数そのものは、今日の一万四千数百ヶ寺（『延享度曹洞宗寺院本末牒』の時点では、一万七千五百四十九ヶ寺）にはとうてい及ばないが、その地域的な発展の軌跡をたどるなら、ほぼ今日に近い分布が完了していたことを知ることができる。それらの峨山下の直弟子達によって開創された諸寺院は、のちに「総持寺直末三十六門」と呼ばれるが、次に二十五哲による開創寺院を一覧にして掲げる。（○印は総持寺五院の開基）

僧 名	開 創 寺 院（所在地）
1 無底良韶 （三六〇・一三六二） ② 太源宗真 （一三七七）	正法寺（岩手） 普蔵院（総持寺）・仏陀寺（石川）

- | | | | | | | | | | |
|----------------|-------|-------------------------------------|------|----|------|----------------|----------------|------|----|
| 15 14 | 13 12 | 11 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 |
| 無端祖環
（一三八七） | 無極尊祐 | 無外円昭
（三二二）
通幻寂靈
（三三七・一三九二） | 普天曉雲 | 曉心 | 太山如元 | 無著深智
（一三八八） | 無際純証
（一三八八） | 無藏浄韶 | 順正 |

- | | |
|---------|---|
| 自得寺（富山） | 皇徳寺・太平寺（宮崎）・皇徳寺（鹿児島）
妙高庵（総持寺）・永沢寺（兵庫）・聖興寺（石川）
竜泉寺（福井）
光穂寺（富山）
補陀寺（秋田）
手・広沢寺（岩手）
岩寺（山形）
瀉・大通寺（千葉）
洞川庵（総持寺）
（福井）
・竜雲寺（島根）
・祥園寺 |
|---------|---|

中世曹洞宗の地方展開と源翁心昭（石川）

16	道叟道愛 (一三七九)	永徳寺(岩手・永林寺(山形・永泉寺(秋田・西光寺(宮城)
17	源翁心昭 (三三九一四〇〇)	最禪寺(秋田・永泉寺(山形・正法寺(山形・冷泉寺(山形・常在院・慶徳寺(示現寺(福島・安穩寺(茨城・泉溪寺(栃木・雲泉寺・慈眼寺(新潟・退休寺(鳥取・化生寺(岡山・玉泉寺(鹿児島)
18	祖山良崇	伝法庵(総持寺)・向川寺(山形・立川寺(富山・眼目寺(富山・覺皇院(石川・大興寺(静岡・護国寺(大阪・瑞泉寺(愛知)
19	大徹宗令 (二三三一一四〇八)	永泉寺(陸奥)
20	大方韶敷	如意庵(総持寺)・永祥寺(岡山・瑞景寺(岡山・正本寺(岡山・靈松寺(長野・總泉寺(鳥取・正法寺(三重・定光寺(石川)
21	実峰良秀 (一四〇五)	建福寺(三重)
22	良岳	長谷寺(宮城)・梅香院(石川)
23	竺堂了源	
24	竺源超西	
25	天沢恵林	

右にみた二十五哲の開山所を県別に整理すれば、陸奥(1)、秋田(3)、山形(7)、岩手(6)、宮城(2)、福島(3)、栃木(1)、茨木(1)、千葉(2)、新潟(3)、長野(1)、富山(3)、石川(2)、福井(2)、静岡(1)、愛知(1)、三重(1)、大阪(1)、兵庫(1)、鳥取(2)、島根(1)、岡山(3)、宮崎(2)、鹿児島(2)となり、寺院数に多少のばらつきはあるが、四国を除いて東北から九州地方に至るまで、ほぼ平均的

に寺院が開創されているのが理解される。そして、これら諸寺院を拠点として、教線を拡張していったのが、中世曹洞宗の地方展開であった。

ところで、道元によって営まれた永平寺僧団は、終始その出家修道的体質を変えことなく相続されたが、そうした性格からは、決して地方展開といった方向に教団が發展することとはあり得なかった。これに対して、永平寺を出て加賀大乗寺に新天地を求めた、永平寺三世徹通義介(一二一九～一三〇九)の門から出た瑩山紹謹(一二六八～一三三五)によって、曹洞宗教団は布教集団として生きる新しい道を歩むことになった。永平寺においても、道元の示寂後、教団の新しい展開を求めて種々の試みがなされたようである。その一つは、永平寺二代懷奘(一一九八～一二八〇)の命を承けて、土風方俗にしたがい、時代に即応した叢林の規矩を求め、京都や鎌倉の禪林を視察し、さらに入宋して彼の地の諸山を歴訪した、義介の行動である。義介は永平寺に帰ったのち、その見聞した知識を傾けて永平寺の運営に当たったが、そのめざした方向には、道元に直参した人達の間で反発があったようで、結局その志は、大乗寺移錫後、弟子の瑩山に受け嗣がれ、日本曹洞宗は確実にその方向に發展していくことになる。一方永平寺は中世を通して寂円派の人々によって一流相続され、道元以来の仏道修行の道場としての純粹さを保っていくが、その

経済的基盤は極めて不安定で、常に興亡をくりかえすのである。出世道場としての資格の問題等については、しばしば總持寺と論争になるが、その背景にはこうした経済的問題も大きく作用している。

さて、曹洞宗教団は瑩山紹謹や峨山韶頌の時代になると、純粹な修道集團としての一面も保持しながら、布教集團としての性格も強く打ち出してゆく教団に體質を転換していったという推測を行ったが、その具体的な事象を、峨山の二十五哲の一人である源翁心昭（一三一九～一四〇〇）を中心に考察し、中世曹洞宗教団史解明の一助としたいのが本稿のねらいである。

ところで、はじめにここに源翁心昭を取り上げた理由がまず確立されなければならない。それは、先の一覽表を見れば一目瞭然とするごとく、源翁心昭開創になる寺院が最も多いことが第一の理由である。そしてその開創寺院も、北は秋田から西は岡山・鳥取、さらには九州にいたるまで、二十五哲の活動範圍に、源翁の活動がそのまま重なることである。同じ峨山門下といっても、個々の禅僧にはそれぞれ個性があるはずであり、また同じく地方展開といっても、いかなる階層の人々に受け容れられたのかということも大きな問題となる。その地理的に広範な地域を活動の範圍とした源翁の行動は興味ある所であろう。

第二の理由は、源翁心昭の伝記上に見られる、他の二十五哲の諸師との家風の違い、あるいは性格の相違ということである。すなわち、那須野ヶ原の殺生石退治にみられるように、源翁心昭の伝記には神異僧的な性格が特徴的に附加されており、源翁開創の寺院には殆んど例外なくこうした神異譚が伝えられている。

第三の理由は、第二の理由とも関係することであるが、源翁派の寺院には門參資料が殆んど見当たらないということが注目されることである。二十五哲の中の主な派、たとえば峨山下の最大門派である通幻派には最も多くの門參資料が伝承されており、月泉派や太源派等にもそれぞれの門參の伝授があったことが歴然としており、修道生活の中で公案話頭を拈提する禅が曹洞宗においても盛行していたことを知り得るが、源翁派の寺院には、これまで調査した限りでは、門參を一点も見出すことができなかった。門參資料とは周知のごとく、公案話頭の捌き方を記録したもので、各門派ごとの參語という意味で門參と呼ばれるもので、何派がどのような公案の處理の仕方をするかは、お互いに極めて重大な関心事であった。源翁派にそれが見出せないということが果たして何を意味するものか。中世源翁派の諸師達はいかなる修道生活を送ったのか等の問題が出てくる。通幻寂靈（一三二二～一三九一）の叢林には活埋阮の話などが伝えられており、峻嚴な修

道生活が髣髴されるが、源翁の寺院にはそうした話は殆んど出て来ず、やはり神異譚が多い。源翁は後に総持寺一門より擯出されたといわれるが、あるいはこうした性格が曹洞宗教団に受け容れられなかったのかもしれない。

本研究は、源翁心昭の開創寺院がほぼ全国にまたがっていることから、史料調査もまだすべて完了したわけではなく、中間報告といったものにしかならざるを得ないが、文献的に見るべきものが殆んど発見できない。しかし、その割には伝説的な事象が諸地域に残されており、それだけ民衆に受け容れられた宗教者であったのかもしれない。「源翁さん」の話として、その地域の人によって受け継がれている。したがって、源翁心昭研究は、文献学的に行うより、宗教学的に処理した方がむしろ有効な処理方法がみつかるかもしれない。たとえば、山形県飽海郡遊佐町の永泉寺は、もと鳥海山中にあった慈覚大師開創の寺で、応永年中の源翁再興の寺院であるが、永泉寺の七不思議なるものが伝えられており、それは、

一、源翁和尚、今も不思議の威徳を現はし給うこと。

一、稻荷大明神が異変を予告し給ふこと。

一、興教山神、開祖の血脈を受けて弟子となり、永く当山を守りて火盜の災なからしむること。

一、慈覚大師、天に祈りたる靈感水は、身の邪氣を払ひ自然に長命すること。

一、慈覚大師惡竜降伏御加持の灰を所持すれば、惡虫の害を免るること。

六、竜灯杉の靈火は、最も神秘であったと云ふこと。

七、開祖の戒めを守って、無声池の蛙は声を出さぬこと。

というものであるが、秋田県湯沢市の最禪寺は、嘉慶元年（一三八七）、源翁の開創寺院で、やはり三不思議なる伝説があり、それは、

一、蛙は鳴かず。

一、蜘蛛は糸をひかず。

一、雨は音せず。

というもので、明らかにある種の共通点を存している。

また、鳥取県の退休寺や岡山県勝山町の化生寺には、江戸期にはじまると思われるが、狐付きを下ろす修法が伝えられていたといわれ、しかもごく近年まで実際に行われていたという。これは、那須野ヶ原の殺生石の前身が、インドより中国を経由して日本に渡来した白面金毛九尾の狐であったという伝説に由来するものであろうことは明らかであり、こうした伝説から考えても源翁派の民衆教化は、極めて實際的な民衆の要求に答える形でなされたものであったことが想像される。

さてそれでは、源翁はいかにしてこのように多くの寺院を建立し、曹洞教団展開の拠点を確立していったのであろう

か。多くの靈驗譚や神異譚が伝えられていることからすれば、直接民衆層に受け容れられたかに見られるが、むしろ逆に、まず在地の領主層、国人層に迎えられ、そこから民衆層に溶けこんでいったと思われる。たとえば、伯耆退休寺は春日山城主篁津豊後守忠敦、結城安穩寺は城主結城直光、常任院は白河城主、慶徳寺は会津領主芦名詮盛の外護を受けて開創維持されている。これらのことから領主層の源翁外護の意図を推測するなら、それは機能的な民衆支配を目的としたものではなかったであろうか。殺生石の話や、石工達が鉄鎚を「ゲンノウ」と呼んでいることから、源翁やその門下には、

石工や山の民との関係があったのではないかとする指摘があるが（『結城市史』巻四）、こうした職能集団を統率できる源翁を外護する形で支配下におくことは、領主層の民衆支配には極めて有効に機能したことと思われる。種々の神異譚に見られる源翁のカリスマ的人格は、その非日常性の故に、民衆心理を吸収するのに極め強く作用することはよく知られ指摘される所であり、（湯浅泰雄「日本思想史における仏教研究のあり方をめぐって」『東洋学術研究』21—1）源翁伝説が今日でも生きて伝承されていることによってもそれは理解できる。そして、そのカリスマ性の背景は、修驗道である。たとえば、永泉寺開創縁起に見られる、鳥海山中住庵の事跡は、まさしく修驗の峯入り修行であり、退休寺や化生寺に伝えられる狐憑

き下としや調伏は、修驗道に特徴的な行法である。さらに、温泉や塩井の発見、水の涌出の事跡などは、鉾脈などの発見もよくする修驗者にして始めて可能であった。そしてそれは、源翁派そのものの歴史的性格であったといつてよい。源翁自身の修驗的要素は、越後国上寺時代に培われたものと思われる。

いったい、修驗道と禅宗、特に曹洞宗は、その山岳修行的性格からも極めて近い関係にあったといわれる。種々の加持祈禱や護符に関する切紙にも共通のものが存し、具体的な交流の軌跡がうかがわれる。もちろん、禅宗の側からは、修驗道とは明確に一線を画していたが、源翁派には伝統的に、こうした意味での一線を画する意識が薄かったのではないかとと思われる。

ただし筆者は、源翁心昭が実は修驗の行者であったなどと主張するものではない。やはり源翁は、一見禪僧らしからぬ性格を内包しながら、身は法体、口には道元の児孫を標榜する、まぎれもない禪僧であったと見る。このようなあり方こそ、むしろ、地方に展開した禪僧の力強い実態を示す一事例であったとみてよいのではなからうか。

（駒沢大学講師）